

平成三十年一月投句

遠山に朝日明け初め霜の里

手締めして解き初む初荷五六人

表向き裏向きに絵馬春を待つ

勝利

寒晴や朽ち葉啄む鳥水漬き

真理子

原チャリが凍町を切り裂いて行く

紫陽花の黄葉のはずれ落ち冬芽

本殿の裏より雪の落ちる音

青空の檜皮葺よりしずる雪

杉の葉はすでに集まりどんど焼

節子

昼の湯のほどよき疲れ小正月

由紀子

祝い歌初荷の車送り出す

猿曳きの袖咬む猿の細き脚

母許の雪の深きを案じつつ

初句会後は湯治の客となり

光子

夜は雨になるらし梅の咲きさうな

平成三十年二月投句

野焼跡阿蘇を続べたる夕焼かな

コーヒーの香に包まれてクロッカス

バス停に降りれば運河炬燵舟

やとすれ違ふお堀のこたつ舟

早春賦歌声聞こゆ資料館

満ち潮を待つ船溜まり蘆の角

小さき文字葉書うづめて寒見舞

鉄橋を連れ越後へ雪解川

ふと覚めて除雪車の音かすかにも

勝利

くさぐさの雛のお道具細やかに

おほかたは海苔舟川の底見ゆる

噴煙の一つは阿蘇野焼く煙

盆梅の古木居並ぶ玉座の間

豆を撒く園児泣きつつ鬼に撒く

西郷どんの額字のびやか梅ひらく

由紀子

光子

平成三十年三月投句

鶉ならしの神事鶉と主低頭し

しやがみこみ何か探す子春田かな

菜の花や幼児は背伸びしてピース

逃げ惑ふ小魚の川みくさ生ふ

飛行機は低く北へと鳥曇

町の音遠くに聞こゆ春一日

吊り革の上ぬいぐるみ春のバス

春野菜白湯に味はふ苦味かな

をがたまの花の梢に雲流れ

勝利

東風の川石に鶉のゐて動かざる

虎枝や地区パトロール自転車で

鶉ならしや娘鶉匠の父を継ぎ

雲雀東風羅漢五百の顔さまざま

梅ヶ香に寢息おだやか看取りの夜

春潮や化石の混じる崖に寄す

光子

節子

由紀子

真理子

平成三十年四月投句

音の無き雨に点りし残り花

声たどれば樋にちよこんと雀の子

マンションの如き船着き花吹雪

花屑の川を渡りて登校す

熊ん蜂一匹お城の広い空

園長は坊さま園児の花まつり

白髪ほめ肌色ほめて豆の花

てんでんの茶飲み話や豆の花

国会に文句の母や風光る

勝利

落書きのごと這い上がる水の虻

橋潜るたび白秋の唄のどか

地震ふりし城とも知らず雀の子

炭坑節踊る輪にゐて月おぼろ

浅草の風に重たき八重桜

日の匂ひ藤の匂ひの磴上る

光子

節子

由紀子

真理子

平成三十年五月投句

ことさらに眼の優しくて袋角

夏野菜を語る白い歯おすそ分け

青蘆を揺らさず鷺の現れり

目印の棒立ててあり文字摺草

大切に守られ育つ袋角

大鳥居からの参道楠若葉

玄関に移りし北斗春の宵

通学路ねち花ちよんとつつかれて

母の日や植ゑし野菜の名を聞きて

勝利

ホトトギス夜々鳴く声の眠りかな

母去にしふるさと枇杷の遠あかり

臆病な鹿に続けり袋角

おもむろに立ちてすり寄る袋角

卯波寄す朱の回廊や巖島

禅寺の老杉の磴上りけり

光子

真理子

由紀子

平成三十年六月投句

紫陽花の迫りて人の波曲がる

梅雨の海茫々雲仙見えざりき

梅雨曇水面にひよいと針を投げ

勝利

水運のかって港や花菖蒲

真理子

埋もれつつ花摘む庭師菖蒲園

手のひらを蹴って逃れし螻蛄の闇

農機具が車道を走る田植え時

釣道具抱え蚊帳吊草の土手

立消えの鵜飼の旅の計画書

節子

炭坑の遺構台座や小判草

由紀子

豆爆ぜるやうに弾ける雹の庭

外灯なきところまで来し蛍狩

シエスタと名付けし医院さくらんぼ

錆びつきし英彦山線や夏の草

光子

万緑の英彦山の山気を胸底に

平成三十年七月投句

土用干まだ梅の色浅かりき

新しく塗りたる壁に蝉の殻

土用干去年の梅は残り五個

勝利

登山杖引く四五人やバス停に

真理子

梅紫蘇の庭に熱れて土用干

十歩でも開いては閉じ日傘

口開けて鳥喘ぐや日の盛り

夕焼ける干潟に潮の縞模様

目印の雲に背泳ぎ曲がりをり

節子

池底の朽葉泡立つ炎暑かな

由紀子

一つずつ干梅甕に収めけり

滴りの山分け入れば摩崖仏

嵐来る月下美人の咲く夜に

打ちつける雨粒夏の灯のにじむ

光子

夏霧の深き朝なり一人居に

平成三十年八月投句

炎帝に蓄を焼かれ佇つカンナ

青葡萄石橋あまた残る郷

遠花火遅れる音の懐かしく

勝利

白粉花や軒に置かれし猫車

由紀子

車椅子寄せし秋桜今年また

そそり立つ崖に靈堂秋のこゑ

白粉の花に社宅の子の寄りて

宝箱底に登山のバッジあり

光子

【お休み】

節子

炎帝につきて耿耿火星出づ

川石に動かざる鵜や秋暑し

腹白く蜥蜴の骸らしきもの

真理子

火星見て土星分からずくつわ虫



平成三十年九月投句

曼殊沙華初む一輪の棚田かな

響き合ふ楽の音長き夜の更けて

中秋や浅くなりけり女性帽

勝利

秋雨や玻璃の守宮の尾の螺旋

真理子

宵闇に懐中電灯来るらしく

掴みたる芋虫箸に踏ん反りて

雲間より現れ出たる鷹渡

中世の荘の名残りや稲の秋

点点になるまで高く鷹柱

節子

莊園を守り継ぐ村の曼珠沙華

由紀子

集落へ一本の道秋出水

国東に札所いくつや水澄めり

裏山は寺領に続き竹の春

藤寺と言はれて久し竹の春

光子

庭生りの紫蘇の実漬けて持たせけり

平成三十年十月投句

転がりし若き木の実の秋の翳

木犀の香に振り向きぬ前の人

上流の暮らしも掛かり下り簾

町内の子供が配る赤い羽根

瀬戸内の島に一日秋の雨

鷹の絵を風に揺らして鳥威

母の髪洗つてやりぬ秋日和

十六夜や名残惜しみつ日々重ね

この先は五島の岬鷹渡る

勝利

研ぎし刃を翳す庖丁秋の晴れ

掃き寄せる紅葉夕べの色さらに

畑よりの煙は川へ鴟高音

水軍の島に露けし供養塔

酒造場の高き煙突いわし雲

ひと雨に色を深めし実むらさき

由紀子

光子

平成三十年十一月投句

赤ペンキの印ある路草紅葉

世事一日暮れてしまひぬ翁の忌

常盤木の社の杜に冬紅葉

勝利

風にのる綿虫に意思ありやなし

真理子

薄の穂散歩の犬の影長く

一夜さに落葉あつまる駐車場

カーテンに時折影や散る紅葉

君そこに居る遺句集や冬ぬくし

本堂に満ちる念仏十夜寺

節子

釣人の影に寄り添ふ冬の鷺

由紀子

落葉掃く夫時折空見上げ

水煙の空青くして银杏散る

看取にも旅の暇や秋日和

柳川の堀の水面の石露明り

光子

あふちの寒くぐり川舟行き交へり

平成三十年十二月投句

初雪に枯山吹の莖緑

P Mの夕焼赤く冬にいる

朝鴟や筑後の盆地霧の中

子供らに囲まれて父蕎麦を掻く

ビオトープ池も畔も冬ざれて

ひっそりと咲きひっそりと菊枯るる

海原も苔も紅葉の散る下に

散紅葉大海原の渦となり

無住寺となりてひとしほ冬紅葉

勝利

手袋に残る形のわが手なり

手袋を脱ぎし母の手やはらかく

吹き曝す玄海の島虎落笛

冬の虹出船の水脈の消ゆるまで

着膨れて流星を待つ十五分

極月の迎賓館へ花鳥の間

光子

節子

由紀子

真理子